

今年こそ県立自然史博物館設立へ大きな一歩を

理事長 天岸 祥光

この度理事長に推薦していただきましたが、正直まだ戸惑っています。というのも、私の専門は宇宙プラズマ物理学でして、この自然史博物館が目指す方向の中には点として存在しない分野だからです。また、多少鳥や植物などに関心が有るといっても、我々のような素人とその道の専門家との間には、月とすっぽんほどの差があり、まして、このネットワークに集合している方々は静岡を代表するその道のベテランばかりです。そこへのこの出かけていくほど私も鈍感ではないつもりでしたが、池谷先生とは長い付き合いでしたし、湯浅先生にはいつもいろいろ教えていただいていますし、三宅副理事長や柴理事の情熱にもほだされてしまい、また、自然史博物館が静岡にまだないのは「異常」だとも思っていて、私にできることがあれば微力ながら尽力させていただこうかとだんだん考えるようになり、躊躇しながらもお引き受けすることにした次第です。よろしく願います。

伊藤二郎先生の「我が思い出の記」の中に、県立自然史博物館設立運動の発起につながる経緯が次のように記されています。『・・・平成7年2月1日に杉山恵一氏が資料を携えてひよっこり私の家に来て、博物館の話をはじめられたが、折角だから他の熱心な方々も呼ぼうということになった。植物研究会会長の湯浅保雄氏、昆虫同好会代表の高橋真弓氏、野鳥の会静岡支部長の三宅 隆氏の3人に電話し、(中略)5名で大いに談合した。(中略)更に静岡県地学会会長の伊藤通玄氏、掛川草の友会長杉野孝雄氏、静岡淡水魚研究会会長の板井隆彦氏を加えて8名で発起人会をつくり、その第1回発起人会を3月16日に行うことになった。』

それから8年後、現在のNPO自然博ネット誕生へと発展し、NPO初代理事長の池谷先生は平成15年「自然史しずおか」創刊号の巻頭言で、『・・・身の回りのローカルな自然からスタートして、東海地域、日本列島、西太平洋一東アジア、全地球、そして宇宙にまで広げたグローバルな視点で、「自然の成り立ち」を理解し、再び足もとの自然を見つめてみましょう。きっとかけがえのない地球の営みが見えてくること

でしょう。そして、この地球がいっそう愛おしく思えてくることでしょう。このような県民の知的活動の場を提供し、それらを支援する体制を整えた自然史博物館を是非私たちの手で創りましょう。』と、このNPOの意義を熱く語っています。



総会で挨拶する
天岸祥光理事長

5月16日、私にとっては事実上初めての理事会に出席しました。そこで感じ取ったことは、県とのコンタクトも得ながら、いろいろな形でフィールドや展示を通して小中高の生徒、教員たちに、これだけの自然を有する静岡県の素晴らしさを、これまで以上に「見てもらおう」という姿勢でした。総合学習(それ自体は問題を含んでいたとは思っていますが)が下火になり、教科書が厚くなり、ペーパーテスト重視の方向性が顕著になってきた中で、こういったより積極的な啓蒙運動は、自然史博物館の設立という大きな目標や理念を下支えする大切な動きの一つになることでしょう。

しかし昨今の経済状況の下、これまで日本各地の文化を支えてきた各種の博物館が今閉館に追い込まれています。特に「分かる人だけが来ればいい」というスタンスの博物館は存在が難しくなってきました。今は博物館設立運動にとって決していい環境ではありません。そんな中、県立静岡南高校の話はこれまでにない朗報ですし、静岡県全体が自然史博物館である、という観点からの県の力強いサポートも期待できるようになってきました。

まだまだイバラの道かもしれませんが、入梅直前の今、いっぱい咲いているノイバラの花も、よく見るとなかなか美しいものです。これまでの長期にわたる努力が報われ、今年こそ一周遅れを取り戻せる大きな一歩になるよう、皆様と共に邁進していきたいと思っています。

総会記念講演

「博物館と遺体科学の挑戦」

遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館教授）



講演中の遠藤秀紀氏

みなさん方が博物館をつくるということは十分に分かっていますし、今日、このフロアーを見ただけでも、あの標本の集め方は非常に健全です。ものごとの99%は笑ってやっていかななくてはなりません、1%くらいは本気で気にしなくてはならないことがあります。今日はそのことが見える話について、少しお話をします。

博物館とは、人ともものが集まり新しい智を生み出す場です。たまたま私の場合は、解剖して死体を集めています。たとえば、これは忠犬八子公のはく製ですが、忠犬八子公は東京帝国大学で解剖され、はく製は国立科学博物館に残され、その臓器は東大にあります。最近、その臓器から癌が見つかり、80年前に死んだ忠犬八子公が癌で死んだことがわかりました。人の営みがすべてフロアーや収蔵庫にあり、その時その時代の新しい考えを生み出すのが博物館です。

これはパンダの解剖の様子ですが、なんでもかんでも集めて記録していくことが博物館の仕事です。私の研究の話をして。パンダの指が何本あるか。今まで6本の指があり、それらで竹や笹を支えていたと言われていました。死体をたくさん集めていると、年間500から1000体の死体が研究室に入ります。世の中は死体を自然に生んでいきます。普通動物園の死体は廃棄物であり、私の研究は社会的にゴミといわれているものを集めています。

蓄積していったら、新しいことがわかってきます。私はパンダの7本目の指を見つけて、パンダは5本の指とその対面の2本の指を使って竹や笹を握っているという結論になりました。

人間は親指を4本の指に対面させてものを握りますが、パンダは熊の仲間でもともと指には鋭い爪があり、獲物をたたき殺して食べる肉食獣でした。そのような肉食獣をものが握ることのできる動物に改造するためには、6本目と7本目の指を加えるしかなかったのです。これにかかった時間は800万年くらいだったでしょう。ヒトガサルのうち2本足で立ち上がって歩いた時代と、パンダが笹を握るようになった時間と同じだと思います。パンダは数少ないウサギを追うよりも、無尽蔵に生えている竹や笹をつかんで食べる生き方を選んで、生き残ってきたのでしょう。

70年ぶりにパンダの指を6本から7本指に書き換えたということが、私の博物館が出した新しい考えです。結構おもしろい発見というのは、10才にでもわかる内容です。この発見はもとはと言えば、社会ではゴミとされていたものを徹底的に集めたことから生み出されたことが、ひねくれた私の誇りです。

みなさんは、いろいろな標本を集めています。それらの標本から新しいことを発見することが博物館です。ということは、実は静岡県この博物館は、組織的には存在しないし、建物も建っていないかもしれないけれど、もう十分始まっています。博物館に完成はありません。博物館は永遠に進行形ですが、さらにそれを時に形をとれない、時にもっと多くの人を集めて、それで博物館を作っていきますか。もうすでにみなさんは、それができる夢のどっかりにきていると私は思います。

博物館とは、どういうものか。もともと日本人は博物館が好きだと思います。しかし、かつて博物館は通俗教育と言われました。明治20年に太政官による公文書では、真理の探究は帝国大学でのみ行い、国家思想を広めるために学校教育があり、最後にその臣民へ技術や実学を普及する補完装置が博物館であるとされています。約150年前、我が国の博物館の辛い歴史はここに始まってしまいます。明治時代に、先進国から近代国家のしくみを我国は学びましたが、国民それぞれがもつ文化は一番最後にどうでもよ

い形でしかもってこれなかったのです。

博物館は制度的にも翻弄されます。その時その時の社会教育の位置づけで、監督官庁が変わっています。戦後、占領軍は文化政策を行い、図書館を日本の全国にしっかり設置しますが、残念なことにアメリカ教育使節団は博物館法をつくった段階で日本から去って行きました。博物館法では、学芸員の設置と利用の無料をうたっていますが、今や博物館の評価は入館券収入がいくらあるかということになっていて、実態と理念とが 180 度乖離してしまっています。

戦後高い理念でつくられるはずだった博物館は、政治の世界でいうと、公共事業と利益誘導のための玩具になり、地域社会では観光と誘客のためのものとなりました。教育の世界では、だめな県立高校教員の島流し場所になりました。戦後の博物館の建設では、入札によって展示業者にまる投げすることで博物館がつけられたために、徹底的にコストダウンされた同じような博物館が全国的につくられ、日本に新しい博物館ができなくなりました。

バブル期の 80 年代から 90 年代には博物館建設ブームで、箱もの博物館が多数建設されましたが、この時代に静岡県は博物館を建設しませんでした。ふざけた市場原理で博物館がつけられているのに対して、静岡には静岡でしかできない、新しい日本でいや世界で最高の博物館をつくってください。そのためには、みなさんがこのようなものに対して確かな目をもって批判をし、ビジョンをもっていくことです。私はそのことに対して、みなさんのものの集め方に、熱意や熱狂を感じたので安心しています。しかし、ちょっと気を抜くと、経済原理は博物館を食い物にしていくので、県民と県政がしっかりと見張って行くことが必要です。

では、遠藤は何をしているのか。私には闘わなくてはならない相手がいます。自然史博物館の標本数では、日本の博物館は世界の大規模な博物館の標本数に比べ、100 分の 1 にすぎません。スミソニアン研究所の博物館は、その広さが哺乳類の収蔵庫だけでフットボール場 12 面あり、このひとつの博物館の収蔵標本だけで日本のすべての博物館の収蔵標本数を超えています。日本の博物館の小ささがわかると思いますが、これからこれに負けないようにみなさんでやっていきましょう。

パリの博物館では「ノアの方舟」と呼ばれる展示室があり、そこは見渡す限り動物の骨ばかり



東京大学総合研究博物館の骨格標本群

りが置いてあるだけで、生きとし生けるものすべてを目にしていける箱です。僕は学者としては、一生これを頭に浮かべながら博物館の仕事をしていくと思います。これを集め始めたのは、ジョルジュ・キュビエという 1800 年ごろの自然史学者・解剖学者で、旧約聖書にある「ノアの方舟」をパリの町につくるという夢をみながら、学生生活をして世界中の動物の骨を集めていたんですね。この建物が建ったのは 1900 年。今 2000 年に我々はすべてを見ることができ、ここに立つと研究者として次のアイデアや意欲が湧いてきます。ここで、さまざまな人が自然を直接感じて、自然に対する関心が湧きあがってくると思います。こういう部屋をつくらなくてはならないとも思っています。

キュビエが夢を見て 100 年経って箱ができ、100 年かけて人間の心を変えている。パリひとつで博物館をつくるのに 200 年かかっている。200 年後の国づくりを誰がやっているのでしょうか。政治家がやらないのでしたら、みなさんひとりひとりがやる仕事で、まして博物館づくりはこれくらい永くやっていい仕事です。ぜひ、いっしょにやっていきたいと思います。

死体や標本、本などのものを集めるということは、死体や標本を生み出している人間の気持ちや社会があり、それを集める博物館は人間の気持ちや社会と強く結びついています。現代社会では死や遺体との関係が乖離しています。教育では、死を含めてすべてのことを子供たちに知らせなくてはなりません。我々は、人が集って、教育をして、教えあって、新しい考え方を生み出す博物館をつくっているのです。もし、博物館が入館者数や市場原理で評価され、それをもって存立基盤とされるなら、我々は年間 1000 万人の入場者のあるディズニーランドに勝たなくてはなりません。我々がやらなくてはならないことは、ディズニーランドに勝つことではなく、人を育てることです。

自然観察会報告 三保ビーチコーミング

石川章子



静岡雙葉学園の清 邦彦先生から
ビーチコーミングの説明を受ける



東海大学自然史博物館学芸員の柴 正博先生
から前浜・後浜の堆積物の特徴を聞く



折戸湾側ビーチで、
さまざまな貝を拾う子供たち



いろいろな、漂着物を探しながら歩く

3月20日(日)三保真崎海岸でビーチコーミングが行われました。風は少しありましたが、晴天に恵まれ、干潮の時間と重なったのでとても浜が広く、絶好のビーチコーミング日和でした。ですが、不意にも津波のイメージが濃く残る時期だったので、海辺での活動は少なからず不安の中での開催となってしまいました。

清 邦彦先生から、打ち上がる物によって、表面からではわからない海底の様子や、海だけではなく海から離れた山や川の自然、地質や歴史、文化や営み等まで知ることができる博物館のようだと伺いました。また、テーマを決めて拾い、拾ったものはコレクションボックスにするといいと、先生が今まで拾った様々なも

のを、小さなプラスチックケースに分けて入れてあるのを見せていただきました。

まず内海の砂浜に出て、柴 正博先生から、波の作る浜の様子や前浜後浜など拾うポイントのレクチャーを受けました。石について、砂岩や火成岩がほとんどで、ほんの少ししかない黒くてすべすべした蛇紋岩や白い石英などを探してみようと伺いました。

私は最初にオレンジ色のナミマガシワが目についたので、黄色やピンクなどいろいろな色のナミマガシワを集めました。かわいい形のキンチャクガイやナガニシ、タカラガイなども拾いました。

内海ではヒトデ、ウニ、カニ、フジツボ、イカの甲、海藻などの海の生物。スクミリン



拾い集められた
ナミマガシワなど貝類やシーグラス

ゴカイ、鯉などの川の生物。栗、タマネギ、ナツミカン、クルミ、オナモミなどの陸の植物。ライター、瓶、茶碗、シーグラス、磁器の欠片、ルアー、ipodなどの人工物…想像していたよりもたくさんの物が落ちているのが見られました。

灯台を越えて外海に行く頃には、目が慣れてきたのか、最初はなかなか見つけられなかった蛇紋岩もすぐに見つけられるようになっていました。外海の波打ち際ではタコ、ウミケムシ、アメフラシ、ユムシ、ゴカイなど生物も多く見られました。

拾い歩くだけでなく、立ち止まり耳を澄ませば鳥の声も聞こえ、足元にはコウボウムギ



拾い集めたものを見せ合う参加者

などの海岸植物も見られました。

最後にみんながどういう物を拾ったか見せ合いをし、他の人が拾った物でいいなと思う物をトレードしたりもしました。私の拾ったタカラガイと女の子の拾ったナミマガシワを交換しました。各々の興味や関心によって、同じ浜を一緒に歩いたの？と思う程それぞれ目に付く物が様々で、そのことも、とてもおもしろいと思いました。

生物、地質の観点から専門的な話を伺いながら体験し、自然や文化について大人から子供まで各々のスタンスで好奇心を満たした「博物館」のような会でした。

自然観察会報告 黒川自然観察会

横山謙二

5月8日（日）に、毎年、静岡昆虫同好会との共催の黒川自然観察会を行いました。天気に恵まれ、30名ほどの参加者がありました。

午前中は、昆虫採集を行いました。春先気温が低い日が続いたためか、例年よりも昆虫が少なかったように思います。それでも、ジャコウアゲハ、オナガアゲハ、カラスアゲハなどが採集できました。

午後は、川の生物の採集を行いました。アマゴ、アブラハヤやタカハヤなどの淡水魚やイモリ、カエルなどが採集できました。



黒川で、水生動物の採集を行う子供たち

静岡のカエル アズマヒキガエル

佐々木彰央



穂積神社で見られたアズマヒキガエル

2011年5月11日、静岡県は朝から強い雨が降っていました。毎年の恒例となっているカエル探しには、うってつけの天気です。私はその晩に興津川の支流である黒川に向け車を走らせました。カエル探しの場である黒川は県内に生息する様々なカエルが観察できるスポットで、県内の14種のうち、黒川では8種類も見られるのです。

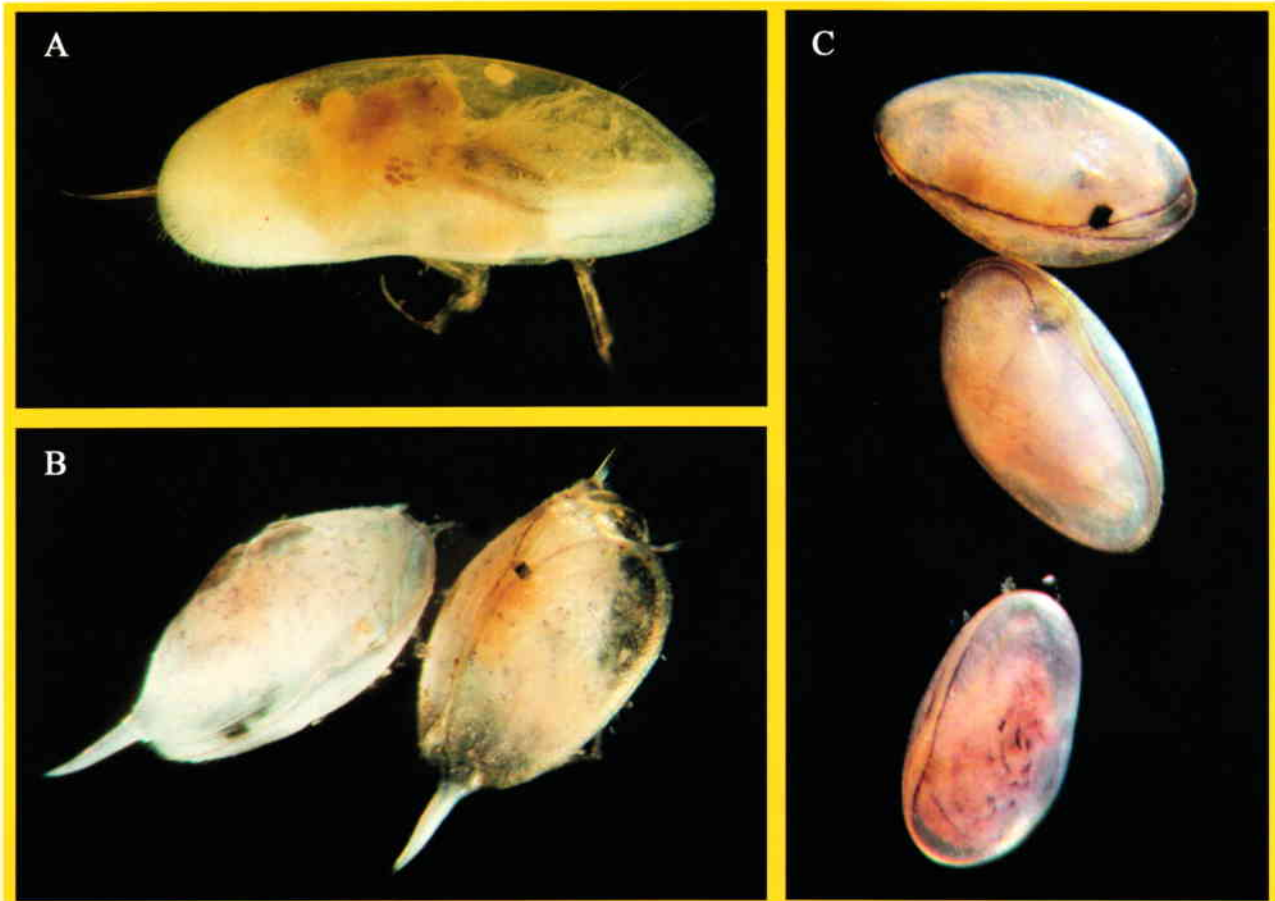
そんな黒川で観察できたカエルの中から大型種であるアズマヒキガエルを紹介したいと思います。体長14.4cm、体重285gにもなる大きなアズマヒキガエルの雌が今回、道路の真ん中でドスンと座り姿を現してくれました。小型のアマガエル（体長4.2cm、体重7.1g、同日に黒川で観察）と比較すると、このアズマヒキガエルがいかにも巨大であるかが、よくわかります。アズマヒキガエルは県内であれば、どこに出現してもおかしくありません。以前に私は、三保半島の海岸近くを歩いているアズマヒキガエルを目撃し、またある時は南アルプスの標高2000m付近の切り立った岩の上で誇らしげに座っている姿も確認しました。富士山の山頂では見ていませんが、いてもおかしくありません。山奥であろうが市街地であろうが関係なく出現する彼らですが、普段どのような生活を送り、また、どのような移動経路で私たちの目の前に現れ出るのかはほとんどわかりません。様々な場所に出現できる理由は、驚異的な生命力によるものです。アズマヒキガエルは、急に-20℃の環境におかれても仮死状態となりますが生きていられるようです。また乾燥にも強く、全身の皮膚が他のカエルと比べると非常に厚い構造になっています。

このようにアズマヒキガエルはタフな体で身を守るのと共に、ブッフオトキシンという毒を分泌し外敵から身を守っています。これと同じヒキガエル属のオオヒキガエルも同様にブッフオトキシンを分泌するのですが、体がアズマヒキガエルよりも大型で毒の分泌量も非常に多く、オーストラリアではペットである犬猫がオオヒキガエルをくわえてしまい毒により絶命する事故が問題になっているほどです。アズマヒキガエルも同様に強い毒を保有し、蛇や哺乳類による攻撃を受けた際は威嚇のポーズとして頭を下げて体を膨らませ、毒を分泌して抵抗するのです。

驚異的な生命力と強力な毒を持つ最強のアズマヒキガエルも冬が過ぎ暖かくなり始めると繁殖のために移動を始めます。繁殖場は川の淀みや池、水溜りなどです。雌の背中に一回り小柄な雄がしがみ付いた状態で多数の卵が管状の卵塊に包まれ産卵されます。2011年5月4日20時に竜爪山の穂積神社で繁殖現場を撮影したので写真を掲載します。

タイ南部ソングラー湖のオストラコーダ

塚越 哲



A: *Stenocypris derupta*, B: *Bradleystrandesia weberi*, C: *Bradleycypris obliqua*

ソングラー湖はタイ南部、マレーシアとの国境近くに位置する湖で、同国最大の湖である。その面積は1,040 km²、南北78kmに達する。ちなみに日本最大の湖である琵琶湖の面積は670 km²である。ソングラー湖は海跡湖であり、東南端では狭い水路でタイ湾に開口しているが、現在はほぼ完全な淡水湖と考えるよい。

筆者は昨年3月、ソングラー大学天然資源学部で水生生物の環境生態学を専門とするサオワパ・アングスパニッチ教授の元に赴き、ソングラー湖で採集されたオストラコーダ（貝形虫、カイミジンコ）標本の提供を受け、その同定を依頼された。提供された標本はいずれもソングラー湖北部沿岸の水面に繁茂するホテイアオイの根から採集されたものである。

検鏡の結果、写真で示した3種が同定された：

A: *Stenocypris derupta* Vavra, 1906 [体長約3mm]

B: *Bradleystrandesia weberi* (Moniez, 1892) [体長約0.9mm]

C: *Bradleycypris obliqua* (Brady, 1868) [体長約1mm]

いずれも、南アジア～東南アジアに広く分布する淡水生種である。淡水生種は、海域に比べて不安定な水域に適応するための乾燥に耐える卵を形成することが知られ、この耐性卵が広域分布を可能にすると考えられている。しかしアングスパニッチ教授は、インドネシアから輸入されたホテイアオイに注目しており、これらのオストラコーダは、このホテイアオイと共にソングラー湖に人為的に持ち込まれたのではないかと考えている。

分類学者として感心させられることは、アジアに分布するこれらの種がヨーロッパの研究者によって、既に100年以上も前に記載されていることである。このような微小な生物にさえも、遍く目を向ける彼らの自然史科学の伝統には敬服せざるを得ない。

駿河湾の深海魚 (4)
 イワハダカ (その1)
 久保田 正・佐藤 武

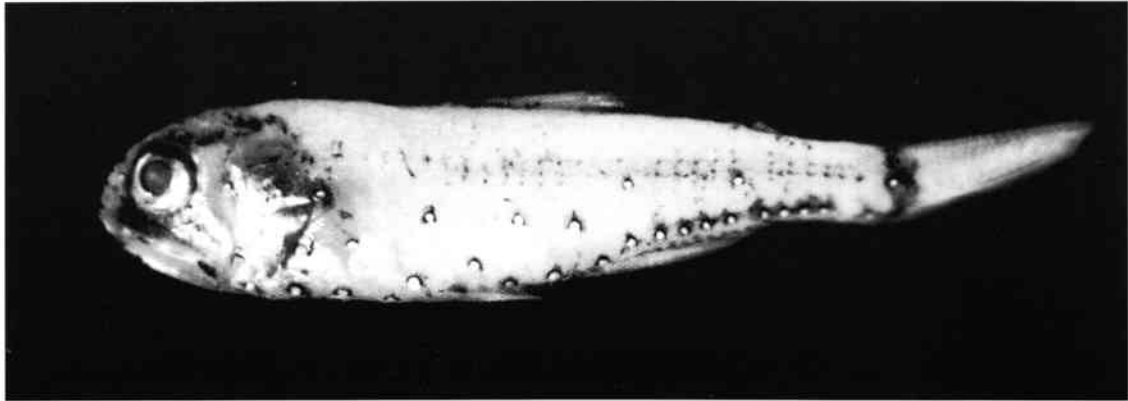


図1 イワハダカ サクラエビ網混獲 体長 38 mm

イワハダカ *Benthoosema pterotum* は、ハダカイワシ科、ソコハダカ属の一種で、日本近海では、黄海、東シナ海、鹿児島湾、駿河湾、相模湾などから報告があります(図1)。その出現は、黒潮の影響を受ける沿岸の大陸棚上またはその周辺海域に限られ、外洋からの報告はありません。また、台湾南方の東南アジア海域からインド洋、アラビア海、紅海などの大陸棚の周辺海域にも生息しています。

最初に、イワハダカが属するハダカイワシ科魚類の特徴について概略を説明しましょう。本科魚類は、ハダカイワシ目に属し世界の海洋に普遍的に分布し中深層性魚類として知られ、世界中の海から約240種が報告されています。体長は、成魚でも2.5cm～30cmを超えない大きさです。種の同定は、体表にある種独特の発光器の数やその配列によって行われています。この発光器は、左右の側面にあって、一部の種を除いて側線よりも下方にあります(図2)。また、鱗は多くの種が剥がれやすいので和名ではハダカイワシ(裸鰭)と呼ばれていますが、イワシの仲間ではありません。英名ではlantern(ちょうちん)fishと呼ばれています。

この仲間は、昼と夜とで生息水深が異なり、一日を単位とする日周鉛直移動を行っています。その夜間の分布様式から次のように分けられています。①海面上昇群：夜間は主に0

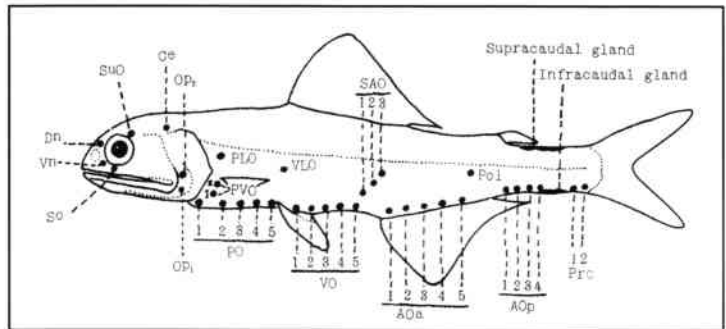


図2 ハダカイワシ類の発光器の一般的な配列とその名称(略語で表記)

～1mまで上昇する。昼間は水深200～400mに下降し僅かに光のある層に生息する。②中層上昇群：昼間は水深400～700m層を中心に生息するが、夜間には100～200m層まで上昇する。しかし海面直下までは上昇しない。種によって上昇水深が深いものと浅いものがある。③非上昇群：昼夜による生息水深がほとんど変化しない。

イワハダカは、上述の②の中層上昇群に属しています。この群には本種の他にスイトウハダカ、トンガリハダカ、イタハダカなど多くの種類が含まれています。また駿河湾産の本科魚類は、18属50種が報告され、本邦では出現種数が最も多い湾として知られています。当湾における本種は、定置網やサクラエビ漁の中層引き網に時々単一種で大量に混獲されることがあります。

図書紹介

小山真人著「伊豆の大地の物語」

静岡新聞社（2010.9 刊行）1524 円＋税

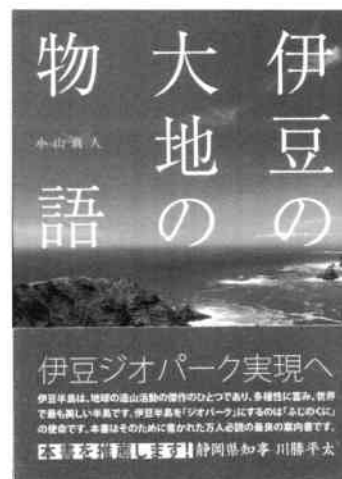
伊豆の大地は、約 2000 万年前にはるか南洋での海底噴火に始まり、火山島としての成長と北上、そして本州への衝突、半島成立といった特異な歴史を秘めている。そしてその火山活動は、災害の原因であると同時に、自然の恵みの源でもある。

本書は、上記のような伊豆の成り立ちとその魅力を、地形や露頭のひとつひとつから、圧倒的なリアリティをもって語りかけてくる。その根源は、著者が卒業研究以来、徹底して行ってきたフィールド調査にもとづく科学的な記述にある。

著者の言を借りれば、「見慣れた地形・風景には、すべて意味がある」「そして、その意味を自分で読むことができるようになれば、目に映る世界は全く違ったものとなる」。本書を通読することで、伊豆半島の風景はこれまでと違った深い意味をおびてくるだろう。本書は、見開き 2 ページで一つの地域やトピックを紹介しており、現地の風景を改めて見つめ直すガイドとしても有用である。

静岡県は、伊豆ジオパークの構想を現在うたっているが、本書はそのテキストとしてもすぐれている。ジオパークは、大地の自然資産を活かした新たな観光のあり方で、ユネスコにより支援されている。ここでは、自然だけでなく、その恵みに活かされた文化や暮らし、地域のつながりが重視される。

著者は、大地の営みの中で災害と恵みが表裏一体であることを繰り返し述べている。このことは伊豆に限った話ではなく、多様な静岡県の自然にも広くあてはまる。静岡県の自然史博物館は、自然史から、暮らしや文化そして防災へと極めてユニークな展開をできる場になれるのでは・・・そのような可能性を教えてくれる一冊である。（文責：延原尊美）



常設展示会「静岡県の自然」

豊かな静岡県の地形や動植物などを、パネルや標本で紹介します。

開催開始：7 月上旬から（原則常時開館するつもりですが、臨時休館することもあります。）

開催日時：月曜日から金曜日の午前 10 時から午後 3 時まで

場 所：静岡県自然学習資料センター 3 階 展示室

※ 展示観覧希望者は、2 階事務室にて受付してもらい会場に案内します。

※ なお、収蔵コレクション展実施中は、常設展示はお休みします。

収蔵コレクション展「世界のアゲハチョウ」

このセンターに収蔵されている約 5 万点のチョウの標本の中から、アゲハチョウの仲間を紹介、展示します。東南アジアのトリバネアゲハやキシタアゲハ、中南米のモルフォチョウなど、見事で美しいチョウたちをご覧ください。

開催期間：平成 23 年 8 月 13 日（土）～ 8 月 31 日（水）

開催場所：静岡県自然学習資料センター 3 階 展示室

開催時間：午前 10 時から午後 4 時まで

※ なお、土日には、チョウ標本の作り方の体験講習も行います。



会場案内図

「東海自然誌」第4号が発行されました！

東海自然誌編集委員会

NPO 自然博ネットの自然史研究報告である「東海自然誌」の第4号が2011年5月31日に発行されました。「東海自然誌」は、静岡県自然保護協会によって1974年から1979年にかけて第3号まで発行された研究雑誌の名称ですが、その名称を継承したものです。「東海自然誌」第4号は、NPO 自然博ネットが発行する自然史研究報告としては創刊号にあたり、今後も毎年発行していきたいと考えています。

第4号の内容は、以下のようなものです。NPO 自然博ネットの会員には配布いたしません、ホームページ (<http://www.spmnh.jp/report/index.html>) に第1号から最新号までpdfファイルで掲載しておりますので、閲覧やダウンロードができます。

印刷部数は250部で、関連する博物館や図書館に配布いたしますが、会員でご希望される方には、1冊送料込1000円にて頒布いたします。ご希望の方は、郵便振替（振替口座番号：00860-8-56970、口座名：自然博ネット）で冊数と送付住所氏名を明記して冊数分を入金してください。振替確認後に送付いたします。

なお、次の第5号の投稿も募集しておりますが、原稿締切期日10月15日とします。静岡県の自然史に関する発見や記録などの資料や短報などを、多くの方に投稿していただければと思っています。



東海自然誌 第4号

東海自然誌－静岡県自然史研究報告－ 第4号

東海自然誌創刊の頃 杉山恵一

〔原著論文〕

静岡県牧之原市大知ヶ谷における2006年ナウマンゾウ化石発掘調査報告
－ナウマンゾウ産出層準とその堆積環境について－

横山謙二・大迫崇史・池谷仙之・深沢哲治・NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク発掘調査団

〔資料〕

静岡県御前崎海岸と茨城県大洗海岸における海岸斃死鳥類

1. 斃死鳥類の状況とテグス等による被害

佐藤顕義・勝田節子

自動撮影カメラを用いた静岡市中山間地の哺乳類の確認とその有効性について

三宅 隆・佐々木彰央

〔短報〕

天竜川におけるゼゼラの静岡県初採捕記録 北川捷康

ユゴイの新産地と採捕場所の特色 北川捷康

静岡市におけるウマノオバチの採集記録 高月 誠・高月 稜・高月宏一朗・高月恵美

問い合わせ先および投稿先

〒424-0802 静岡市清水区辻 4-4-17 静岡県自然学習センター内

NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク辻事務所 Tel & Fax: 054-367-2111

投稿規定：http://www.spmnh.jp/inform/nhsr_edguid.pdf

静岡県立静岡南高校の視察

事務局



静岡南高校玄関



静岡南高校図書室を見学する

静岡県によって、自然系博物館候補地にあげられている、静岡県立静岡南高校の施設を5月18日に見学に行ってきました。天岸理事長をはじめとして、理事など8名が参加し、県企画課職員3名と共に高校施設をくまなく見学してきました。

静岡南高校は、昭和58年に開校し、まだ28年しかたっていない県立としては新しい高校です。少子化による生徒数の減少などにより、平成25年3月をもって閉校となり、他の高校と統合されることになっています。県企画課は、この閉校後の校舎を利用して、自然系博物館として再整備し、26年4月に開館する予定で計画を立てています。

場所は、日本平のふもと、静岡市駿河区大谷

にあり、静岡大学の裏手の高台に建っています。校舎からは駿河湾が一望できる、いい環境にあります。全体の校舎敷地は約57,000㎡。3階建ての校舎と、体育館、プールなどの施設、および21,000㎡の運動場があります。教室30室や、生物、化学などの実験室、パソコンルーム、図書室など整備されています。今回は、これらの部屋を博物館としてどのように利用できるか、下見とすることです。

今後、今回の視察結果をふまえ、必要な追加設備や自然系博物館として起動するための組織や付属施設などについて、当NPOとしても、県への提言や意見を出し、夢の実現に向けて積極的に関わっていきたいと考えています。

川勝静岡県知事

「静岡県自然学習資料センター」を視察！

3月22日、突然、川勝静岡県知事が、清水区辻の「静岡県自然学習資料センター」に来所され、収蔵コレクションなどを視察されました。短時間ではありましたが、コレクションの多さに感激され、静岡南高校への移転、静岡県立自然系博物館の開館にも言及され、どのように活用したらいいのか、早めに検討するよう言われました。



川勝静岡県知事に標本の説明をする三宅副理事長